

モンテッソーリ イン アジア・北京 2011 国際大会 参加ツアー

公益財団法人 才能開発教育研究財団

日本モンテッソーリ教育総合研究所

主任研究員 櫻井美砂

今回の国際大会参加ツアーの目的は、教育に携わる私たちが、所属する組織や文化における価値観だけで、これからの教育のあり方を考えるのではなく、モンテッソーリ教育という共通の教育理念をもつ世界の人々との交流を通して、世界の動向を体感し、視野を広げ、改めてこれからのモンテッソーリ教育の実践のあり方やその役割を考えていただく一つの機会となることを願って企画されました。教師という職業は、限られた人との関わりの中だけでも成立するため、閉鎖的、独裁的、踏襲的になりやすい側面があります。しかし、社会が進歩発展する中で、教育のあり方もまた時代とともに変わる側面があるはずです。

『モンテッソーリ イン アジア 国際大会』は、年に一度、アジア地区で開催されています。第三回目となる今年は、台湾、上海、シンガポール、韓国、ロシア、日本、イタリア、アメリカなどからの参加者が北京に集まり、盛大に開催されました。大会前日は、北京市内のモンテッソーリ教育施設見学と公開保育が行われ、大会2日間は終日、各国からモンテッソーリ教育を含む教育現状の発表とパネルディスカッション、および今回のテーマでもあるアジアにおける西洋の教育システムの適合についてという観点から、レッジョ・エミリアの教育理念の説明とその実践発表もありました。



大会会場 : 新雲南クラウンプラザ

アジアにおけるモンテッソーリ教育は、モンテッソーリ教育の先進国であるアメリカから多くのことを学び発展してきました。しかし、今後はアジアにおけるモンテッソーリ教育の普及と発展のため、文化的な背景の違いや、伝統を考慮したアジアにおける、アジアのためのモンテッソーリ教育を考えなければなりません。その考えは、モンテッソーリが目指した、「教育による平和な世界の建設」にもつながっています。

この大会は、組織として50年の歴史をもち、モンテッソーリ教育団体としては世界で最大規模の米国モンテッソーリ協会 (American Montessori Society 略してAMS) の協力を得て運営されています。AMSもまた、1960年にアメリカ独自の文化、社会に適したモンテッソーリ教育の発展のために設立された組織です。その際の様々なノウハウをもとに、アジア各国のモンテッソーリの同胞が互いに手を取り、モンテッソーリ教育に対する理解を深め、今後の教育のあり方を模索していく目的で開催されています。

大会前日は、北京にあるモンテッソーリ教育施設を3校見学しました。Fu Yi Yuan Kindergarten は開園してから10年となる公立幼稚園です。この地域には公務員が多く、国が運営しているため、私立のモンテッソーリ



Fu Yi Yuan Kindergarten

園の月謝が約 5000 元（約 6 万円）に対し、1000 元（約 1 万 2 千円）という月謝で運営されているそうです。

Etonkids Central Park グループ 2 校は、私立幼稚園で、18ヶ月～3歳までの保育施設（各 20 名）と 3歳～6歳までの保育施設（各 25 名）があり、AMS の資格を持つ教師が指導にあたっています。

見学に訪れたいずれの施設でも、『水墨画』や『刺繍』などの伝統文化の継承を促す教育がカリキュラムの中に位置づけられていました。

きめ細かに整備された環境の中で、子どもも教師もにこやかに活動に取り組む姿が印象的でした。



Etonkids Central Park

中国の幼児の保育・教育制度は、0歳から3歳までの子どもは、衛生部門が管轄する託児所が保育し、3歳から6歳の子どもは、教育部門の管轄する幼稚園が保育・教育します。双方を合わせて「託幼工作」と呼び、関連各部門による総合行政のしくみがあります。両親共働きという就労事情や現地の需要に合わせて設置運営されてきたようですが、最近では、子ども観や教育観も大きく変化し、自由を尊重する教育観の広がりに合わせて、モンテッソーリ教育や、レジジョ・エミリア教育法なども積極的に取り入れられているようです。また、0歳～3歳の教育も「早期教育」と称して、盛んになってきているようです。1978年からの、「改革開放政策」（鄧小平主導で始まった政策で、従来の計画経済を脱して市場原理を大胆に採り入れた）や「一人っ子政策」による、一人の子どもを取り巻く6人（両親と双方の祖父母）の大人の存在が、教育にかかる投資額を増やし、英才教育に対する関心の高まりに拍車を掛け、関連事業をも活発化させているようです。保育施設の環境構成や、芸術活動の取り入れ方などからも中国の乳幼児教育事情の一面をうかがい知ることができました。しかし、一方で、中国の都市部と農村部での大きな格差が問題となっています。幼児教育は義務教育ではないため、国からの保障がなく、なかなか幼児教育の環境が整備されないそうです。近代的な国民的教育として幼児教育の地位を向上させ、農村部への設置に重点を置き、0～3歳の教育を重視させていくという今後の方向性が中国私立教育協会理事長である Guo Fuchang 氏より示されました。

今回の大会では『アジアにおける教育的なモザイクを検証する』というテーマをもとに講演およびパネルデ

イスカッションが行われました。アジア諸国は、レッジョ・エミリア、シュタイナー、モンテッソーリ教育、多重知能理論など、多くの西洋の教育法を取り入れ、モザイクのように寄せ集めて教育を行っています。今回は、それらの教育理念や具体的な方法を実際に学び、西洋の教育法がアジアの文化、社会にどのように適合していくのかを検証することになりました。東洋と西洋の教育における価値の違いを検証する発表や、反対に、儒教という中国の代表的な思想から、西洋のモンテッソーリと東洋の孔子の教育理念において、例えば「子どもの特徴に合わせて教育する」という教師の姿勢などの類似点を挙げ、東洋に古くから伝わる思想の教育的意義を再認識することを示唆する発表もありました。

当研究所上席研究員である松浦公紀先生は、『大人ではなく、子どもの興味・関心を土台とした活動のあり方』というタイトルで発表されました。東洋と西洋の教育における価値観の違いを前提にそれぞれの利点と問題点を踏まえた上で、平和な世界を築く担い手となる子どもにとっての、望ましい教育のあり方とは何か、会場にいるすべての教師に問題提起され、その役割の重要性を以下のように述べられました。

「西洋の文化では、個人に価値が置かれるのに対して、東洋の文化では個人よりも集団、コミュニティに価値が置かれています。それは、西洋が多民族国家であるのに対して、東洋は基本的には単一民族国家であることにも起因しています。教育はこういった文化的、人種的状况と関連し、日本では個よりも集団に価値が置かれ、一斉画一的な教育が主流となりました。利点は、一斉教育によって和や統一性、一体感や秩序や品位が助長され、共同体意識が育まれたことにあります。その中で教師は知識の伝授者として位置づけられました。しかし、それは、教師が教室を支配し、権威によって簡単に子どもがコントロールされる危険性をはらみ、戦時下の軍国主義をも連想させます。教師主導教育を受けてきた教師は、モンテッソーリ教育を理解し実践しているつもりでも、伝統的な教育手法から脱することができず、知らず知らずのうちに子どもを管理している可能性があります。『教育現場は子どもが自ら学ぶ場でなければならない』ということを念頭に、自らの保育を常に検証する必要性があります。教師は、子どもをよく観察し、興味を出発点として活動と子どもをつなげていかなければなりません。提示はあくまでも、子どもと環境をつなぐ役割に過ぎず、教具は子どもにとって『世界を解く鍵』でなければなりません。提示された通りにしかできない、あるいは自分で考えること、創造すること、問題を解決することができなければ、それは、子どもに知識を伝授するという伝統的な教育手法でモンテッソーリ教育を行っているに過ぎません。子どもに存在する『自己教育力』を前提とした正しい教育を通してこそ『新しい人間』が誕生し、モンテッソーリ教育の究極の目的である『平和』が築かれるのです。」

私は、『モンテッソーリ イン アジアの国際大会』への参加は2回目となりますが、アジアの方々との交流の中で感じるのは、西洋の教育法を学び、この素晴らしい教育法を自国に根付かせたいという強い思いと、自国の素晴らしい文化を、未来を担う子どもに継承していくために、単に真似るのはなく、先人たちが築いてきた自国の文化に敬意を持って、両者を融合させようとする決意と努力を感じます。違いがあるからこそ、新たな視点が与えられ、自分を省み、教育の質が高められるのだと思います。今回のように、モンテッソーリ教育以外の教育法に触れることも新たな視点や発見につながるでしょう。一歩外へ踏み出してみないと、自分の保育のありようはなかなか見えません。今後も、積極的に様々な文化や教育法に触れてまいりましょう。また、皆様にお目にかかれる日を楽しみにしております。



松浦公紀先生による発表



レッジョ・エミリア教育法の実践発表

『虹をつくる』

